

## 〔課題演習抄録〕

思考力・判断力・表現力の関連的育成を目指す中学校社会科学習の一考察  
ーシンキングツールの活用を通してー

庄 司 洸 祐

Kosuke SHOJI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：思考力・判断力・表現力，関連的育成，シンキングツール（イメージマップ）

## 1 研究の目的

本研究では、公民としての資質・能力の内実である思考力・判断力・表現力を育む授業実践を試み、「授業分析」を通して、生徒が社会的に思考・判断・表現しようとする姿を明らかにするものである。授業実践においては、シンキングツール（以下、TTと表記）を用いて、生徒自らの思考を可視化できるようにする。

## 2 研究の計画

4,5月	先行研究検討，研究構想，教材研究
6月～9月	授業実践，研究の分析・まとめ・修正
10月	先行研究検討，教材研究
11月～1月	研究実践，研究の分析・まとめ

## 3 研究の内容

## (1) 先行研究

北（2017）は、近年の「思考力・判断力・表現力」育成のみに特化した指導を行うことへの危惧を示し、社会科学という教科の内容・目標を無下にすることはできないと述べている。北は、社会科学の目標・内容の実現の過程や結果において、「思考力・判断力・表現力」を育む必要があると主張し、3つの能力を育成する授業の視点として、①アクティブ・ラーニングの実践、②問題解決的な学習、③「見方・考え方」を身に付ける学習、④「何をやるのか」を押さえた授業を展開するという、4つの視点を重視した。中でも筆者は、④については、「思考力・判断力・表現力」の基盤となる知識・技能の習得が重要な視点であると主張しているように考える。しかし、知識・技能を基盤として「思考力・判断力・表現力」を育成することは、これ

までの社会科教育と大きな違いはない。さらに、社会科の内容と「思考力・判断力・表現力」との関係についても詳しくは述べられていない。

梅津（2009）は、「習得」「活用」「探究」といった学習過程の工夫によって「思考力・判断力・表現力」の育成をめざした。梅津は、表現力について、思考し判断した結果を説明する技能とし、授業内において思考力・判断力をいかに育成するかがポイントであるとしている。そのためには、①社会認識力育成型授業、②社会判断力育成型授業、③批判的思考力育成型授業の3種類の授業が、社会科学歴史学習に固有の思考力・判断力を育成する授業の基本型であると述べている。この3類型を、単元の特色や内容に合わせ、学習過程を組み立てていくことが、「思考力・判断力・表現力」の育成につながるとしている。梅津の研究では、歴史的分野に関する考察が中心に行われているため、地理的分野や公民的分野にも対応できるような学習過程を検討する必要がある。

黒上ら（2012）は、TTの有効性について、様々な知識や思考を、書く活動を通して可視化することによって頭の中を整理し、新しい知識や考えが生まれることであると主張している。また、思考を活性化させるために、TTを用いて制約を与えることによって、思考内容を活性化することができるかと述べている。このようなTTの活用を行うことによって、思考力・判断力・表現力が関連的に育成されることが考えられる。

ただ、TTの活用については、社会科学のみならずすべての教科で用いられているため、社会科学で活用する意義について明らかにしていく必要がある。また、社会科学教育において、これまでもTTを用いた授業実践は数多く見受けられるが、画一的な使い方が非常に多い。そのため、本研究においては、「その子らしさ」を表現することができるTT

の方途を明らかにしていく。

## (2) 授業実践

### ① 授業実践の概要

対象	M 市立 C 中学校第 2 学年 (2 クラス 60 名)
単元	「北海道地方ー自然環境の視点でー」
本時	北海道地方のまとめ (6/6 時間)
主眼	北海道地方の学習のまとめとしてイメージマップを作成する活動を通して、授業で得た知識や生活体験から得ている既存の知識を図式化することによって、自然環境、生活、観光、産業の 4 つの視点を、関連的に表現することができる。

### ② 各過程の実際

本実践においては、TT として、イメージマップ (以下、IM と表記) を採用した。その理由として、IM は、学習内容と生徒の生活経験から得た知識を自由に記述し、事象と事象の関連性や学習した内容の知識を再構成しやすいと考えたためである。

導入では、IM 作成の手引きを提示し、作成方法を 3 段階に分けて説明した。手順 1 は、これまでの北海道地方の既習内容を想起させ、広げること重点を置いた。手順 2 は、手順 1 で広げたものの関係性に気づかせるために、事象をつなげることを意識させた。手順 3 は、事象をつなげる際に、線の太さや枠の工夫、事象の強調、吹き出しなどを付加することで、その事象に対する自分の考えや、資料から調べてわかったことを記入させ、自分なりの IM を作成することを意識させた。

展開では、IM の作成とその交流活動を行った。その際、IM の内容が、画一的なつながりを目指すのではなく、広がりや偏りが生まれて良いことや、自分がわかりやすいようにまとめて良いことを強調し、オリジナリティを重要視させた。また、机間指導の際に、なぜその事象がつながっているのかということを問い、事象と事象の関連の説明を促すようにした。さらに、IM の交流を行い、他者の視点や工夫などを取り入れさせるようにした。

終末では、交流活動を活かし、再度自分の IM を整理させた。その際に、他者の IM を見て参考になった部分を色ペンなどで可視化できるようにし、自分なりにまとめ直して記入させた。

りしながら、つなげた意味について記述していた。下図の生徒 A の IM は、特に、北海道地方の自然環境と産業の関連性について詳細にわたって記述していた。具体的には、語句を囲む枠や線 (矢印や二重線など) の工夫を行いながら、事象の特色を捉えたイラストを書き込むなどを行っている。つまり、単に事象 (語句) の羅列ではなく、社会的に思考・判断した結果が IM に表現されていると考えられる。また、若干ではあるが、交流活動において、自他の IM を見合い、それを基に交流を行うことによって、新たな観点から事象同士をつなげることができた IM も見受けられた。

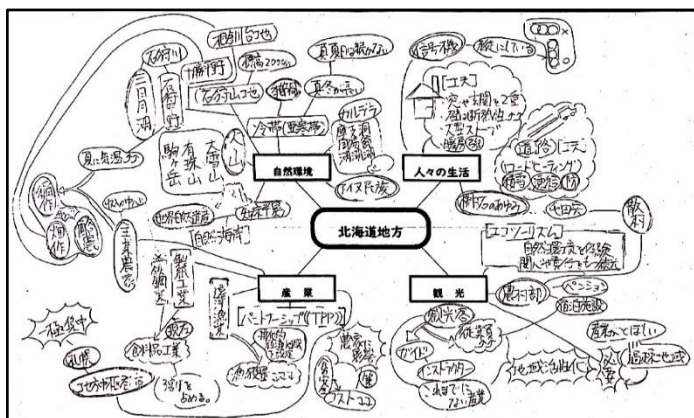


図 生徒 A が作成したイメージマップ

### (2) 課題

本研究の課題として、IM 作成の手引き手順 1 に留まった IM が多く見られたことが挙げられる。IM を作成する際に、調べたことを記入し、広げることは十分にできていたが、広げた事象と事象のつながりについては、十分な考察ができなかった。手順の提示方法について再検討が必要である。

また、IM を活用した交流活動の在り方が、今後の課題として挙げられる。IM をより良いものにするために、交流を設定したが、生徒にその必要性を十分に感じさせることができず、他者の IM を書き写すのみに留まった交流が数多く見られた。思考力・判断力・表現力を関連的に育成するために、どのような手法が有効か探っていく必要がある。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

本研究の成果として、多くの生徒が TT (IM) を活用しながら、学習した内容を再構成し、自分なりにまとめることができたことが挙げられる。どの IM に関しても、記述の多少はありながらも、既習の語句を線でつないだり、調べた根拠を示した

### 主な引用・参考文献

- 北俊夫 2017 『「思考力・判断力・表現力」を鍛える新社会科の指導と評価 見方・考え方を身につける授業ナビゲート』 明治図書
- 黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕 2012 シンキングツール～考えることを教えたい～ (短縮版)
- 国立教育政策研究所 2013 社会の変化に対応する資質能力を育成する教育課程編成の基本原則
- 梅津正美 2009 思考力・判断力を培うために、「習得」・「活用」・「探究」の学習を活かすー社会科授業改革の実質化をめざしてー